

「中国南京研修参加報告書」

京都大学文学部3年 山崎菜穂

① 学習成果

約一か月の留学期間中、午前の一つ授業、午後の一つ授業という場合を除き、午前中に授業が行われることがほとんどで、午後は自由時間なので、自習をしたり、大学周辺の探索をしたりなど、各々が自由に行動することができた。海外での生活や、すべて中国語での授業というのは、気づかぬうちにエネルギーを消費してしまっているもので、午後は昼寝をせず過ごすということもあったが、三週目あたりになると徐々に慣れてきて、地下鉄に乗って繁華街へ買い物に行ったり、近所の飲食店に行ってみたりすることができた。

授業はすべて中国語で、最初はとても緊張したが、予習・復習を地道に繰り返すうちに、中国語のスピードに徐々に慣れていき、先生との距離も縮まっていった。授業の内容は初級の文法と口語であるから、内容はそんなに難しいわけではないが、先生の質問を聞き取ったうえで積極的にこたえていかなければならず、それを繰り返すうちに聞く力と話す力が養われていく。中国人の話す中国語はやたらと速く、また年配の人になると方言も混じっていたりして、なかなか理解することができない。なかなか聞き取れないことに落胆されたりあきれられることもあったが、それでも打たれ強くホテル従業員のおばさんや、バスで席に座っているおじさんに話しかけたりした。中国の人々は多くがとても優しい人で、話しかければちゃんと聞いてくれ、わかるまで話してくださる人が多かった。一か月は思いのほか早く過ぎ、自分で実感できるほどの進歩はなかったが、中国語という言語を母語としている人々はどのような人たちで、中国はどのような国なのかということを知らないままにこれから先中国語を勉強し続けなくてよかったと、一か月過ごしてみて心から思った。中国語に限らず、何か言語を勉強するならば、その言語が話されている場所へ行ってみるといのはとても大切なことだと感じた。

② 中国での経験

実際に行ってみると、中国と日本は大きく違うということ強く実感させられるようなことをたびたび経験し、五感を刺激され、喜怒哀楽様々な感情が生じた。一番嬉しかったのは本屋でたまたま見つけた中国の漫画がとてもおもしろかったこと。一番感動したのは、中山陵から帰る途中のオカリナ屋で、「君をのせて」の生演奏をきいたこと。まだ中国に行つて間もないときで、なじみ深いメロディーを異国で耳にする感慨と心細さ、オカリナの澄んだ音が相まってとても心にのこった。一番楽しかったのは、同じクラスの仲間たちと毎晩夕食を食べに行ったこと。最初は名前からどのような料理かを想像して頼み、最後にはそれぞれがお気に入りの味を見つけることができた。夕飯の時ばかりはみんな勉強のことを忘れて楽しみながら本場の中華料理を味わい、一日で一番心の安らぐ時間を過ごすことができた。一方一番怖かったのは、週末天文台の観光をしに行ったときに、怪しげなおじさんの勧誘につかまり、山頂の天文台まで崖のような道をぼろぼろの車に乗せて連れていかれたこと。細い柵のない道を猛スピードで上っているときに、本当に死ぬのではないかと思った。一番悲しかったのは、不注意でパソコンを壊してしまったこと。一番怒ったのは、夜11時すぎに就寝した直後にホテルのフロントから電話がかかってきたこと。そして、一番驚いたことは、日本と違って道路がめっちゃくちゃなこと。車も歩行者も自転車もバイクも、それぞれが自由に動くので、道路に日本のような秩序はなく、信号がある道を渡るのでさえ一苦労だった。日本の道路が静かすぎると感じるくらい、クラクションが絶えず鳴らされ、あちこち本当ににぎやかだった。今振り返ってみても、本当に内容の濃い一か月を過ごしていたのだと感じる。部屋にこもって勉強することよりも、実際に街に出て、失敗してもいいのでいろいろなことに挑戦してみるもののほうが、ずっと身に染みて勉強になったような気がする。

③ プログラム内容

平日は授業があるが、午後はほとんど自由時間だったので、各々が自由に好きなことをすることができた。毎週金曜日には自由参加で観光名所に無料で連れて行ってもらうことができた。実際に行った場所は、孫文の墓である中山陵、南京民俗博物館、総統府、南京博物院で、ガイドさんが中国語で案内してくれるので、それを聞くのも勉強になった。

④ 進路への影響

もともと中国語学中国文学専修ということもあり、将来はおそらく中国や中国語に関係のある進路を選ぼうとおぼろげに考えていたが、今回中国に行つて、実際に中国語を使うとはどういうことなのかということがやや明確になり、将来のビジョンも想像しやすくなったように感じる。